



監督＝オードリー・ウェルズ／
 出演＝ダイアン・レイン／サン
 ドラ・オー／リンゼイ・ダンカ
 ン／ラウル・ボヴァ／ヴィンセ
 ント・リオッタ（ブエナ ビス
 タ インターナショナルくジャ
 パン）配給／2003年アメリカ映
 画／113分）

夫の裏切りと突然の離婚によって、幸せな生活のすべてを失った主人公は、1人傷心の旅へ。美しい国、豊かな食材の国、陽気な国そして恋愛の国、イタリア。トスカーナで300年前の古い大きなお屋敷を「衝動買い(?)」した主人公は、その改修工事や新しい人々との出会いの中、新たな人生が……。美しいトスカーナの田園風景の下で、多くの人々との交流を経て、心の痛手を負った主人公が立ち直っていく姿は、ダイアン・レインの名演技もあって感動的……。

🎬 前提——フェリーニ監督とイタリア映画

この映画では、イタリア映画における巨匠フェデリコ・フェリーニ監督とイタリアを代表する渋い男優マルチェロ・マストロヤンニについての「知識」が不可欠。それがなければ、この映画での風刺の効いたユーモアを理解できないから面白みが半減してしまう……。

フランス（ダイアン・レイン）がトスカーナへのツアー旅行で、市場を見学している時に見つけた、ハデハデしい女性がキャサリン（リンゼイ・ダンカン）。このキャサリンは、ホントかウソかわからないが、少女時代にアイスクリームを食べながら歩いていたなら、巨匠フェリーニに見い出されたというのが自慢。少し頭がおかしいのかもしれないが、今でも楽しい夢を持ち続けながら、生活を楽しんでいるから、彼女の存在は傷心のフランスを勇気づけるいい起爆剤となった。

後述の「白の勝負服(?)」を提供してくれたのも彼女。また映画の後半、キ

チャサリンが噴水の水に入りこみ、一人夢の世界で踊るのは、フェリーニ監督作品に欠かせない存在となったマルチェロ・マストロヤンニが、主演として初出演した映画、『甘い生活』（60年）のワンシーン。また、フランシスを夢中にさせたイタリアのハンサムなプレイボーイ（？）の名前がマルチェロ（ラウル・ボヴァ）というのも、もちろんちょっとしたシャレ。

以上の「知識」を前提として、以下、私の評論を進めよう。

主人公は不幸を一身に背負った（？）女流作家

サンフランシスコに住むフランシスは女流作家。そして仕事も結婚生活も順調なはず、だったが……？ 突然の夫の裏切りと離婚請求。その上、収入を得ていたのはフランシスだったため、お金を夫に払うか、それとも逆にお金をもらって家を夫に渡すかの二者択一を迫られた。そこで彼女は、思い切りよく（？）スッパリと家を手放した。引越し荷物は本をつめこんだ3個の段ボール箱だけ。

傷心のフランシスを支え、力づけたのは妊娠中の親友パティ（サンドラ・オー）。パティはいつまでもふさぎ込んでいるフランシスに新たな旅立ちの必要性を述べ、トスカーナへのチケットをプレゼントした。女同士とはいいながら、彼女たちの会話の1つ1つには、言葉に対する責任と自分の行動の選択についての明確な「意思」を感じることができるため、私にははすごく好感がもてる……。

トスカーナとは？

トスカーナはローマの北方にあり、西側は地中海に面する中部イタリア最大の州。私はイギリス・フランス・ドイツ・スイス方面は旅行したことがあるが、イタリア旅行には行ったことがない！ トスカーナ州ではその州都のフィレンツェやピサの斜塔が有名。またぶどう畑やオリーブ畑が広がる田園風景が美しいまちとのこと。スクリーン一面に広がるひまわりの美しさには圧倒される。是非一度行ってみたいところだ。

こんなトスカーナへのツアーに1人参加して、傷心を癒す旅に出かけたフランシスは、当初は特別気乗りしていなかったものの、一面に広がる田園風景や市場での散策、新鮮なぶどうを食べながらハガキを代筆する仕事（？）、そしてハデ

ハデしい衣裳を着たキャサリンとの出会い、などによって少しずつ心が癒され、明るさを取り戻していった。

人生の転機はお屋敷の衝動買い！

ツアー旅行中、フランシスが目にしたのは丘の上のまち、コルトーナにあるブラマソーレという名の売り家。元伯爵家が所有している広大な敷地の中に建つ築300年の家は、荒れ果てているものの、やはり魅力的。

ツアー旅行のバスを降りて、この家に入り込んだフランシスは、購入を決めていた先客の中に割り込む形で価格交渉に。全財産から必要経費を差し引いた値段を提示しても、やはり無理……。ところが、あきらめかけて帰ろうとしたフランシスの頭の上に、突然鳩のフンが落ちてきた。これを見た老伯爵夫人は「幸運が降りてきた！」として、イッパツでご成約！ やはり何事にも運は大事……。

お屋敷の改修は大変！

私も土地バブルになる前の今から20数年前に、300坪の敷地に建つ、古いけれども広大な家を見に行っていたことがある。価格は1億〇千万円……。家の中には女中部屋もあり、もし私がこの土地・建物を購入したらどんな風に使おうか、と夢をめぐらせたもの。全部は無理だから敷地の半分と家だけでも……とかいろいろ考えたものだ。結局、これは「高嶺の花」で終わったが、そういう物件を自分の目で見て、自分が使う場合の「構想」を練るだけでも楽しいし、勉強になるものだ。この映画で、フランシスが異国の地で全財産をはたいてお屋敷を購入するのは、いくら何でもちょっと無謀すぎるが、まあ映画だからいいだろう……。古い建物を購入した時、想像以上にかかるのが改修費。映画では、職人頭のニーノを筆頭に、若いパヴェル（パヴェル・シャイダ）ら3人のポーランド人の職人が何日もかかって改修工事にあたっているが、果たしてその費用は……。私が心配しても仕方ないが、そういう現実にも目を向けないと……。

親切な不動産屋さんは魅力的

売買の仲介をした不動産屋のマルティニ（ヴィンセント・リオッタ）はすごく

親切でいいおじさん。日本では、不動産屋のイメージはあまりよくないが(?)、このマルチニは値段交渉のやり方も誠実だし、その後の行動も紳土的。1人で家の改修に精を出すフランススを何かと応援する中で何となくモヤモヤとした雰囲気芽生えてきたが、マルチニは大人で紳士。ぐっとそれをおさえたから、2人の仲はずっといい関係のまま……。

不動産屋ながら、彼がフランススを励ます言葉には含蓄がある。大きな家に1人きりで住み、その改修工事に励んでいたフランススは、ある日突然言いようのないほど激しい孤独感に襲われ、「料理を作ってあげる家族がほしい！ この家で結婚式を挙げたい！」と泣き叫ぶが、これを静かになぐさめるマルチニの言葉には十分説得力がある。彼が静かに語るのは、列車が走る見込みもたないのに、先に敷かれた線路の話。つまり、いつか列車が走ることを夢見て先に線路を敷くことの意義を先にお屋敷を購入してしまったフランススに対して実にうまく伝えたわけだ。

女性を口説くのがイタリア男の仕事！

イタリア人はみんな陽気(?)。フランススの隣りの家に住むプラチド(ロベルト・ノービレ)は、フランススが1人ぼっちで食事をするのがよくないと、ある日夕食会にご招待。喜んで出席したフランススの隣席の男は、フランススを熱いまなざしで見つめ、執拗に口説いていたが、何と彼は妻帯者！ また、気分転換をかねて、ローマのまちへ買物に出かけたフランススをナンパ(?)しようとして追ってくるのは、3人の若い男たち。とっさの機転で、その場にいたある男性との「待ち合わせ芝居」をしたフランススだったが、この男性もフランススを熱いまなざしで……。ところがフランススは、このハンサムな男マルチェロに一目惚れしてしまった。そして2人は……。何ともイタリアの男性はみんな女を口説くことに熱心なことだ。俺も見習わなければ……？

マルチェロとの恋の行方は？

マルチェロとの衝動的で情熱的な一夜はフランススにとって感動的なものだった。そしてフランススもやっぱり女。久しぶりの燃えるようなセックスによっ

て、自分の魅力にあらためて気付いたフランシスは、がぜん自信を回復し、えらく元気に……。何ともすごい変わりようだ。マルチェロの「解説」によれば、「恋は盲目」という言葉は、万国共通とのこと。ホンマかいな……。ところが、何の前ぶれもなく突然アメリカから妊娠中の親友パーティがトスカーナにやって来たため、マルチェロとの2回目のデートの約束は延期。さらにその後もすれ違いの連続。イライラするフランシスはそんな中、ついに自分からマルチェロを訪問する決心をしたが……？

勝負服は白いドレスだが……

愛するマルチェロに会うために、フランシスが着ていく服は……。日本の川口順子外務大臣のイザという時の「勝負服」が赤なら、フランシスの「勝負服」は白のドレス！

パンフレットによると、この白のドレスは、ヒッチコック監督の『裏窓』（54年）でのグレース・ケリーの衣裳を参考にしたとのこと。そして、そのココロは「理想の男性に会いに行くとき、彼の方から白いドレスと言ってきたら脈ありということ」らしい。もっともフランシスは、ダメな場合も考えて黒いコートも持っていったが、それが何ともいじらしい……。白のドレス1つについても、こういう深い配慮（？）があることを理解すれば、より詳しくかつ繊細に女心の分析ができようというものだ。やはり何事も努力と勉強が大切……。ところが、このフランシスの意気込み（？）は空振り。長い空白期間（？）の中、既にマルチェロには新しい彼女が……。ヘタをすると、ここでドロドロしたケンカになるところだが、マルチェロを責めないフランシスもえらいし、事態を冷静に説明するマルチェロのセリフは心にくいほど説得力のあるもの。やはりプレイボーイのマルチェロの女の口説き方（？）は一本筋が通っており、大いに感心（？）させられる。俺も一度はこういう風に言ってみたいものだが……？

若い2人の恋はフランシスの良き刺激剤？

長い改修工事の中で芽生えたのが、ポーランド人の若い職人パヴェルと隣りの家に住むプラチドの美しい娘キアラとの恋。プラチドは、家族も財産もないパヴ

エルとの結婚は認められないと強く反対したが、これを側面から応援したのがフランシス。もっともこの応援は、単なるお節介や親切心からではなく、この2人の燃えるような純粋な恋から、自分も「恋する力」や「生きる力」を得たかったからに違いない！ その意味では、この2人の恋はフランシスにとって、良き刺激剤になったはず……？

花を供える老人のエピソードはおシャレ

ベランダから下を見つめるフランシスの目に入るのは、敷地内にある祠に毎日新しい花を供えにくる1人の老人（マリオ・モニチェッリ）の姿。彼が花を供える対象は、亡くなった愛妻だろうか、それとも恋人だろうか？ 老人は、ベランダ上のフランシスには一切興味を示さない。フランシスが何度か目であいさつをしても、毎度無視されるだけだった。それは、この老人が、祠の中に入っている彼女(?)との2人だけの世界を邪魔されたくないからだろう。恋の思い出はいつまでも続くもの……？ しかし、そんな彼もついにラスト近くでは……？ ちょっとしたエピソードだが、いかにもイタリア風でおシャレ……。

ダイアン・レインの名演技に拍手！

この映画の主人公は、ダイアン・レインが演ずるフランシスただ1人。傷心のフランシスが、トスカーナへの旅によって立ち直り、新たな人生に向かって希望をもって進んでいくというシンプルなテーマを、実にイキイキと表現力豊かに、そしてわかりやすく演じている。突然の離婚話に呆然自失状態になりながら、気を強くもって懸命に弁護士と実務的な話を進めるフランシス、古い建物の改修に夢中になるフランシス、寂しさに泣き叫ぶフランシス、マルチェロとの情熱的な恋に有頂天となるフランシス、マルチェロに振られてしまい自己嫌悪に陥るフランシス、そして最後には、この広いお屋敷の中で幸せをつかむフランシス。どんな幸せかは映画を観てのお楽しみだが、やっぱり映画はハッピーエンドがいい……。そして、こんなさまざまな姿のフランシスを、ダイアン・レインは実に見事に演じ、表現している。そんなダイアン・レインに大きな拍手を送りたい！

2004(平成16)年4月22日記